

開業八ヶ月

暮れから正月にかけて二週間以上も快晴が続き、連日富士山がよく見えた。しかし今日は朝から冷たい雨が降っている。午前中の患者は十八人だけだった。もう少し来て欲しいのだけれどこの天候じゃ仕様がなにか。

小医院の開業以来八ヶ月、このところ患者が少し増えてきた。とはいっても一日三十五人を超す日はそんなに多くはない。収支償って自分の給料が出るようになるには、多分その倍くらいの人数が必要ならしい。

勤務医の頃は休日は純粹に楽しみだった。今は一日休診にすればナンボの損と、すぐにそれを考える。昨年八月、夏休みをたった五日取っただけで猛烈な減収になって、立ち上がり早々とても痛かった。

しかし診療の現場では当然といつか不思議といつかカネのことは忘れている。「嘘だろ」といわれるかも知れないがホントに、患者を診ながらこれでいくらなんて考えもしない。考えてもどうせ計算など出来はしないということもあるが。もっともこれが収支の数字に化けて紙の上に並ぶともういけない、早く楽になりたいと焦ってしまう。俗物たるかな。

ともかく今日は第二水曜で午後休診。こんな天気だからむしろ休診でよかったといいながら、かみさんと待合室のビデオを見ることにする。平生積ん読の雑誌やら各種通達やらを処理したり、あれこれの雑用を片付けているうちに半日はすぐに経ってしまう。で、今日は特別。

三ヶ月も前からダビングを頼んだまま観る時間の取れなかったシャーリー・マクレインの「アウト・オン・ア・リム」を一挙に観てしまおうというわけだった。

前後二巻のテープに印が無かったので間違えて、クライマックスである魂の体外浮遊場面のある後編の方を先に観てしまった。無数の星の輝く大気圏外に浮かんでいる「霊」と、地上に残っている身体を結んで撓んでいる銀色の紐が、いかにも重く固そうな鋼のロープそのものなので興奮めであった。撮影には苦心しているのだろうけれど、元来がリアルな映像にするのが無理な情景である。

人の意識が肉体から抜け出してそこいらを浮遊するという話自体を、まるで馬鹿げたおとぎばなしだというつもりはない。尋常ならざる心理体験としてはあるだろうと思う。浮遊した状態で見聞したと考えなければ説明の出来ない経験を語る人が居るのも事実である。

しかし霊という非物質的であろう筈のものと肉体との間を、細い紐の如き物質が繋いでいるというのは全く頂けない説である。しかもその紐が切れたら霊は身体に戻れなくなつて、それが即ち肉体の死だなどというオハナシは、三途の川とか天国地獄と同類項で、真

実らしさを求めて無用の説明詳細に走り過ぎ、かえって話をグロテスクに歪めていると思う。何が真実か本当のところは判らないけれど、これは嘘だ。初めから真実らしくないことをいくらリアルに描いたって仕方がない。

何故自分は此処に居るのかを真剣に考える人は好きである。シャーリー・マクレインという女優もそういう人らしい。この映画も真面目で悪くない。しかし文章として読んだ方が遥かに良い題材だと思う。

前編に返って一応全部観終わったら四時半、雨は上がって窓の外には薄陽がさし始めていた。

(五時通信 第一七一号 一九九〇年二月十日)